

U35 のメンバーが市民にわかりやすくレポートします！

## 傍聴記

10年後の自分と、京都のまちの、  
ミライとモンダイを考える。

## 京都市基本計画審議会

レポーター 平岡 さつきさん

1980年生まれ兵庫県神戸市出身。学生時代より京都に居住。月刊情報誌『Leaf』の編集者となり、京都取材してまわる毎日。ビールと伏見をこよなく愛する



## 第7回うるおい部会

開催日：平成22年7月23日(金) 会場：京都ホテルオークラ  
主な議題：重点戦略案について「市民生活とコミュニティー」、「市民生活の安全」、「文化」分野の基本計画第2次案の検討

## POINT

1

## 上から教え込む、ではなく



「環境教育」という言葉はいかにも上から教え込むような響きだが、そうではなくて子供達が身の周りの環境から自然と学習できるような機会をいかに用意するかに目標を置くべきだ」という話がありました。

## POINT

2

## 全員が納得する答えはない



何回もの議論やパブコメを経てここへきているはずの素案なので容易に変更できず、しかし全員が納得する答えも得られない、といったもどかしさが全体的に漂い、10年後の未来を議論することの難しさを感じました。

会議のポイント

会議を傍聴して思ったこと

委員の皆さんが「こう書かれています、このようなケースもありますのでこれも加えるべきだと思います」というように抽象的な概念を加筆していかれるので、文言がどんどん増えてしまい、最終的には膨大な文字量となります。多様な立場に身を置く人々の事情をもらさず踏まえて文言を仕上げたいというお気持ちも分かりますが、長くなるほど市民にとってはわかりにくくなると感じました。私が基本計画を見る際には、例でもいいから具体的施策の箇条書きを見てみたい。市民に対しては「一緒に考えてもらう」よりも、この施策が施行された時自分の生活はどう変わるだろうと身近に「感じてもらう」ことを第一目標に置いた方がいいのではと思いました。

京都は古くからある都市で、各町はそれぞれ自治意識が高くつながりが深い。また京都生まれの若者は京都を出不ず定住する傾向があるように思います。つまり、家族間も近所間も絆が強く、相互扶助的な風習が色濃く残る街。人と人とのつながりが薄くなっているといわれる現代日本において、このお土地柄はこれからお手本とされるべきなのではと思います。昔、職住一致だったことに由来するこの相互扶助精神を未来でも維持しつづけるために、考えられる新しい施策…。「SOHO in KYOTO」と銘打って在宅仕事を奨励するとか、高齢者を社会から疎外せず親族が一丸となるライフスタイルを応援するとか。その際には家族のための月刊誌「グラン・リーフ」発刊を是非ご検討下さい！

京都の未来に向けて  
思いを馳せること

今年は10年に一度の、京都市の10年後を考える年です。  
市政をよく知り、よく考え、利用し、参加し、仲良くなろう

